



こころを育む
総合フォーラム

こころを育む総合フォーラム
全国運動

活動のご案内 & 2008年度 受賞事例集

「こころを育む総合フォーラム 全国運動」は、
下記企業からのご賛同・ご支援をいただき活動しております。

新日本製鐵株式会社
東海旅客鉄道株式会社
トヨタ自動車株式会社
パナソニック株式会社
株式会社読売新聞東京本社

こころを育む総合フォーラム 全国運動に関するお問い合わせ



こころを育む
総合フォーラム

財団法人 パナソニック教育財団内
こころを育む総合フォーラム 全国運動事務局

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-10 第2ローレルビル 6階
TEL 03-5521-6100 FAX 03-5521-6200
URL <http://www.kokoro-forum.jp/>

●「こころを育む総合フォーラム 全国運動」は文部科学省の後援をうけています。

「こころを育む総合フォーラム」より

「こころを育む総合フォーラム」は、多発する残虐な事件や組織の不祥事、親子関係の希薄化など昨今の社会事象から見てきた日本人の心の荒廃に危機感を抱き、はどめをかけたいとの思いを共有する有識者16名が集い、2005年4月に設立されました。設立以来、家庭・学校・地域・企業などの視点から討議を重ね、07年1月に提言書をまとめ、発表しました。

そして08年より、この提言を具体化するきっかけづくりとして、全国各地ですでに実践されている、こどもたちの「こころを育む」事例を募集しました。優れた活動を支援し紹介することで、「こころを育む」運動の輪を全国に広げて行きたいと考えたのです。

第一回となる今回は、全国から210件の多岐にわたる活動が寄せられました。まず、各地域のPTA・学校・NPO関係者などによるブロック審査を行い、「こころを育む総合フォーラム」有識者メンバーによる本部審査を経て、各賞を選出いたしました。そして、09年3月20日に開催したシンポジウムは、受賞団体・個人の方々を招き表彰を行うと共に、実践者同士の交流を深めていただく機会にもなりました。

本書では、第一回受賞全15事例を紹介いたします。そのすべてが、子どもたちと真摯に向き合いながら「こころを育む」ことを実践しており、さらに進める工夫・広げる工夫・続ける工夫に満ちたすばらしい取り組みです。本書が、今回の受賞団体・個人をはじめ地道に活動が続ける方々へのエールとなり、また新たに活動へ参加や支援を考えている方々にとって一歩を踏み出すきっかけとなれば、「こころを育む総合フォーラム」としてこんなにうれしいことはありません。

■こころを育む総合フォーラム 有識者メンバー（2009年6月2日現在）（敬称略・50音順）

安西祐一郎（慶應義塾大学 教授）
石井 幹子（石井幹子デザイン事務所 主宰）
葛西 敬之（東海旅客鉄道 会長）
金澤 一郎（日本学術会議 会長）
佐々木 毅（学習院大学 教授）
滝鼻 卓雄（読売新聞東京本社 会長）
張 富士夫（トヨタ自動車 会長）
遠山 敦子（パナソニック教育財団 理事長）

永井多恵子（前 日本放送協会 副会長）
中村 邦夫（パナソニック 会長）
中村 桂子（J T生命誌研究館 館長）
野依 良治（理化学研究所 理事長）
本田 和子（お茶の水女子大学 名誉教授）
三村 明夫（新日本製鐵 会長）
山折 哲雄（国際日本文化研究センター 名誉教授）
鷲田 清一（大阪大学 総長）

C O N T E N T S

子どもたちのためにできること
「こころを育む総合フォーラム」からの
“七つの問い” 4

「こころを育む総合フォーラム 全国運動」
とは？ 6

「こころを育む総合フォーラム シンポジウム」
を開催しました 8

〈受賞事例紹介〉

全国大賞
子どもの自己肯定感を育む、「いのちの講座」
社団法人 群馬県助産師会（群馬県） 10
【活動領域：家庭・学校】

特別賞・ブロック大賞（中国・四国）
家族や仲間大切さを、心身で学ぶ野外研修
NPO法人 森と海の学校（山口県） 14
【活動領域：家庭・地域】

ブロック大賞（北海道・東北ブロック）
限界集落へ「未来の大人たち」がくれた元気
あじ島冒険楽校（宮城県） 18
【活動領域：家庭・地域】

ブロック大賞（関東ブロック）
学校を拠点に、育ち合う地域づくりを
足立区立第十一中学校 開かれた学校づくり協議会（東京都） 20
【活動領域：家庭・学校・地域】

ブロック大賞（中部ブロック）
歌声で地域をむすぶ、多彩な体験交流活動
少年少女合唱団マーレ（福井県） 22
【活動領域：家庭・地域】

ブロック大賞（近畿ブロック）
食育を通じた、子どもを見守る地域づくり
特定非営利活動法人 ふれあいネットひらかた（大阪府） 24
【活動領域：家庭・地域】

ブロック大賞（九州・沖縄ブロック）
学校を、子どもと大人が集う「ひろば」に
KSVN嘉瀬小学校ボランティアネットワーク（佐賀県） 26
【活動領域：家庭・学校・地域】

個人賞
自他を認め合う、自己表現プログラム
金杉 朋子（東京都） 28
【活動領域：学校】

奨励賞（北海道・東北ブロック）
手作りの劇を通して、世代間交流を
くしろゴールデンシアターきり座（北海道） 29
【活動領域：家庭・地域】

奨励賞（関東ブロック）
家庭・地域と協力し、道徳教育を推進
越谷市立大沢小学校（埼玉県） 30
【活動領域：家庭・学校・地域】

奨励賞（中部ブロック）
子どもの可能性を広げるミュージカル創作
特定非営利活動法人 リトミックGifu（岐阜県） 31
【活動領域：地域】

奨励賞（近畿ブロック）
造形あそびを通して、能の魅力を体感
財団法人 山本能楽会（大阪府） 32
【活動領域：家庭・地域】

奨励賞（中国・四国ブロック）
地域ぐるみで、子どもの夢をサポート
夢配達人プロジェクト神石高原町実行委員会（広島県） 33
【活動領域：学校・地域】

奨励賞（九州・沖縄ブロック）
自然を知り、生き方を考える体験学習
久米島ホテルの会（沖縄県） 34
【活動領域：家庭・学校・地域】

奨励賞（個人）
子どもから地域へ広がる環境保全活動
向井 哲朗（鳥取県） 35
【活動領域：家庭・学校・地域】

アイコン
説明

受賞事例紹介ページでは、「活動領域」と「活動を通して育むことができる3つのこころ（くわしくは6ページ）」をアイコンで表示しています。

●活動領域



家庭



学校



地域



企業

●3つのこころ



自分に



他者に



社会に

向かうこころ 向かうこころ 向かうこころ

子どもたちのためにできること

「こころを育む総合フォーラム」からの 「七つの問い」

「こころを育む総合フォーラム」では、子どもたちのこころを育む活動のヒントとなる“七つの問い”を呼び掛けています。
家庭・学校・地域・企業など、子どもたちを取り巻くすべての場所で、きっとできることがあるのではないのでしょうか。

家庭



- 子育てはみんなの手で
- 大事にされているという体験、それが信頼の基礎
- 子育てにもっと高い社会的評価を
- 母親を孤立させないための仕組みを
- 子育てを楽しみと感じられる環境を

家庭での育みを見なおすための七つの問い

- 1 幼い子どもに、親(保護者)は、たっぷりと愛情をそそいでいるだろうか？
- 2 子どものよい点をしっかり誉めて、自信をもたせているだろうか？
- 3 子育ての不安、ストレスへの対応は、家族、親戚、近隣、保育所などでともに担われているだろうか？
- 4 子育ては苦勞もあるが、幼いいのちを育む喜びと楽しみがあるということが、きちんと認識されているだろうか？
- 5 親(保護者)の姿勢が、子どものこころを創っているという自覚があるだろうか？
- 6 家庭で、子どものころからよい生活習慣を身につけさせているだろうか？
- 7 子どもは社会のみんなが育てるもの、家庭はそのなかでもっとも重要なものだとして認識しているだろうか？

学校



- 学校は社会性を身につける場所
- ともに力を合わせて学校をつくるという態度を
- 「いじめ」をめぐって
- 学校をもっと開いていこう
- 社会の一人ひとりが人を育む気概を

学校での育みを見なおすための七つの問い

- 1 学校は、子どもたちにしっかりと学力を身につけさせ、先生や友人との関係をつうじて対人関係の基本を育んでいるだろうか？
- 2 教師は、一人ひとりの子どもに自信をもたせる努力をしているだろうか？
- 3 学校では、道徳教育を魅力的で説得的なものにするよう、工夫をしているだろうか？
- 4 道徳教育の時間だけでなく、学校全体で「こころを育む」という姿勢をとっているだろうか？
- 5 学校では、「こころを育む」ための具体的なアクションをとっているだろうか？
- 6 学校と親(保護者)とは、たがいの立場を尊重・理解し、協力しあう関係にあるだろうか？
- 7 学校と地域の大人たちは、一致協力して、子どもたちの居場所、子どものための相談場所を設けているだろうか？

地域



- 子どもが自然に育つ場
- みんなで協同して事にあたる力を
- 地域社会の新たな役割
- 子どもの視点に立ったまちづくりを

地域社会における育みを考えるための七つの問い

- 1 地域のだれもが、子どものこころを育むという姿勢で、子どもに接しているだろうか？
- 2 地域として独自の役割を考え、学校とセットで、子どもたちの学習環境をつくっているだろうか？
- 3 地域社会は、子どもたちが自立して力強く生きていく力を育てているだろうか？
- 4 地域のなかに子どもたちの居場所をきちんと設けているだろうか？
- 5 地域教育プログラムの充実と活性化を図っているだろうか？
- 6 地域活動への参加を子どもたちに促すための施策を実施しているだろうか？
- 7 子どもたちの視点に立ったまちづくりをしているだろうか？

企業



- 文化としての「育み」
- 思いどおりにならないこと
- 子どもたちを苛む(わたし)への問い
- 企業も地域における子どもたちの「育み」をともに担おう
- 情報社会という環境

企業・メディアによる育み支援を考えるための七つの問い

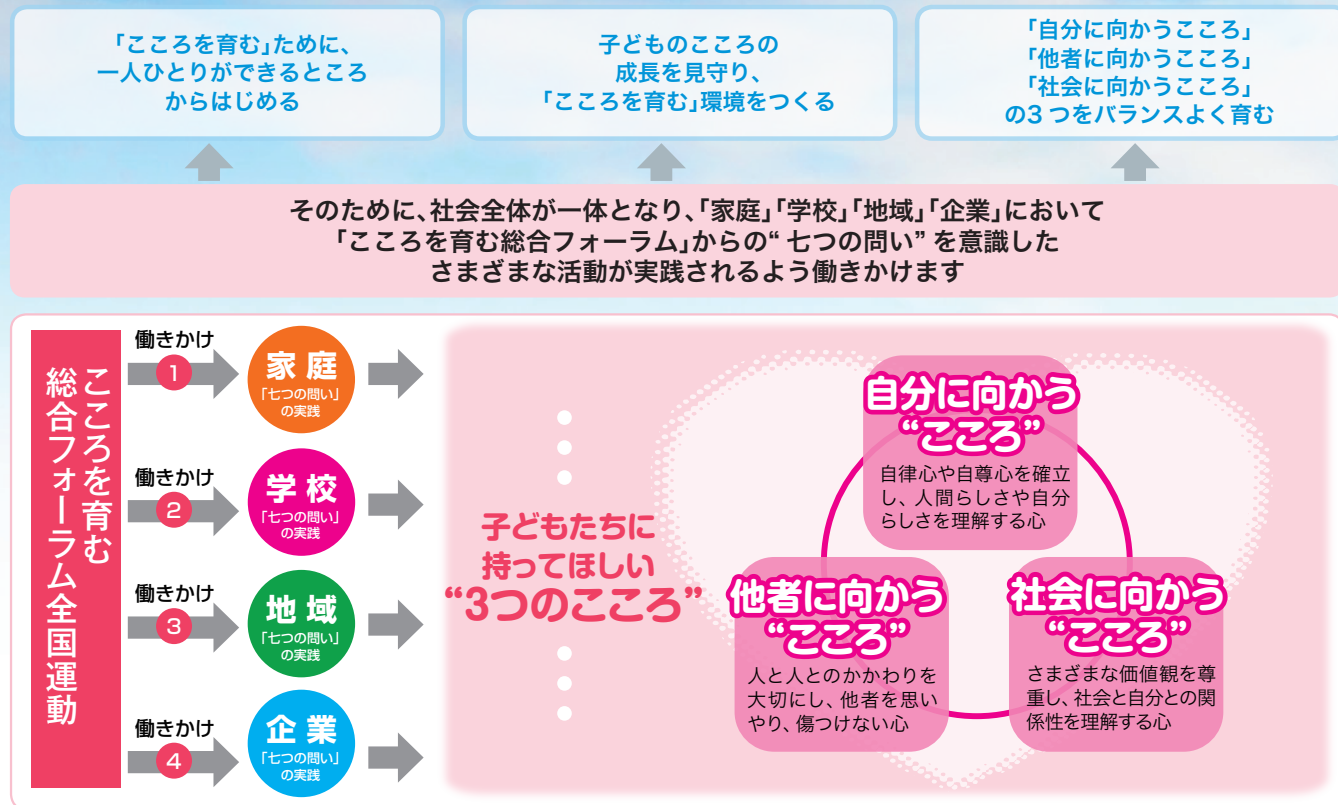
- 1 企業は、その使命と役割を自覚した行動ができているだろうか？
- 2 企業人は、みずからが同時に市民・生活者であることの自覚を十分にもっているだろうか？
- 3 企業人一人ひとりが、同時に市民・生活者として、よりよい社会づくりに積極的に関与しているだろうか？
- 4 企業みずからが、市民としての社員教育に積極的に取り組んでいるだろうか？
- 5 メディアは、子どもたちに学びや仕事の意義や楽しさを、きちんと伝えているだろうか？
- 6 メディアは、地域のすぐれた教育活動の事例を、進んで報道しているだろうか？
- 7 わたしたちの社会は、高度情報化社会が子どもたちの対人関係に与える影響を考えた対応をしているだろうか？

■なぜ、今、全国運動を呼びかけるのか

想像を絶する残虐な事件、組織の不祥事、人として守るべきマナーの欠落。

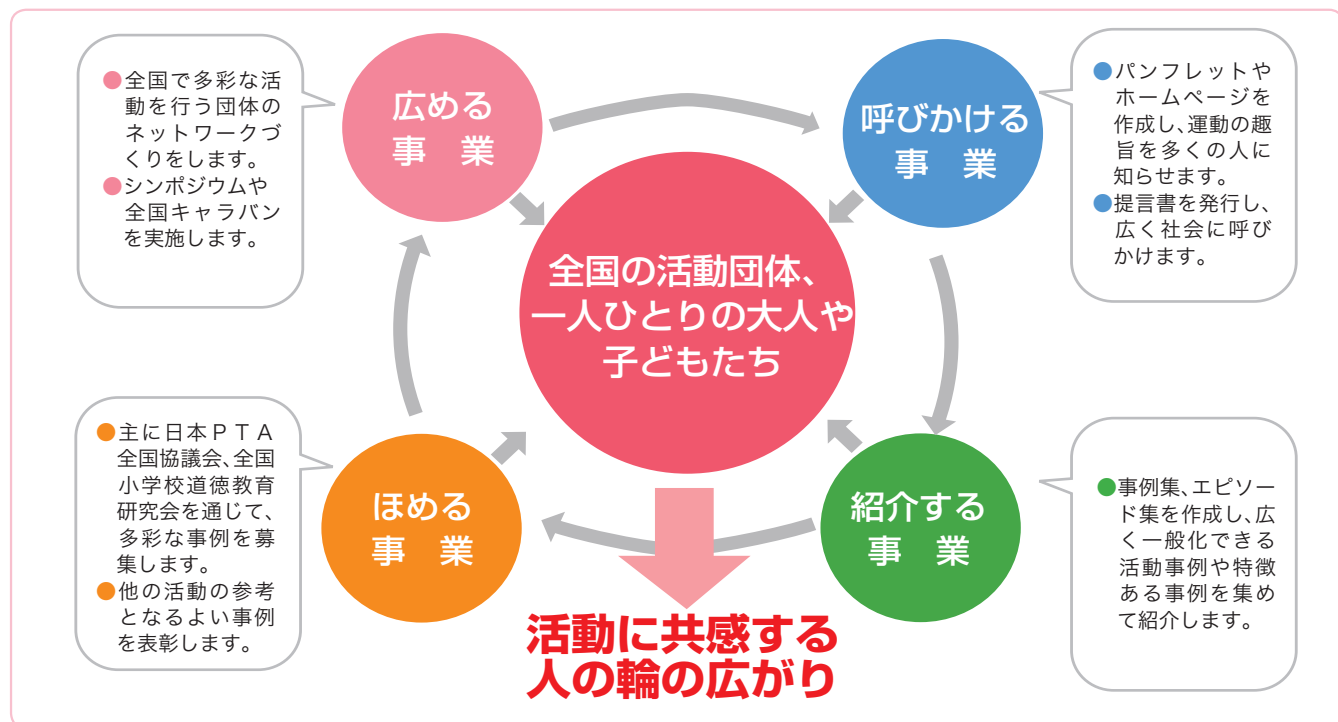
私たち日本人が本来持っていたはずの素晴らしい倫理感はどこへ行ってしまったのでしょうか。このような状況に危機を持ち、未来を担う子どもたちのために、個人や団体でさまざまな活動をされている方々がいます。「こころを育む総合フォーラム」では、そのような活動を応援し、全国に広げるために、そして子どもたちの健やかな未来をみんなで考えるために、「こころを育む総合フォーラム 全国運動」を呼びかけています。

■「こころを育む総合フォーラム 全国運動」のねらい



■「こころを育む総合フォーラム」が実施する主な事業とは

全国各地で実践されている、子どもたちの“こころを育む活動”を支援するために「呼びかける事業」「紹介する事業」「ほめる事業」「広める事業」の4つの事業を展開いたします。



■呼びかける事業

事業のねらい

「こころを育む総合フォーラム 全国運動」の趣旨をより多くの人に知らせ、共感する個人・団体を増やすことと同時に、広く社会一般に問題提起をします。

事業内容

パンフレット、ホームページ、新聞等のさまざまなメディアを活用しての広報を実施します。

- 1 社会全般への呼びかけ**
有識者会議※での検討内容を提言書として発信し、社会への呼びかけや問題提起をします。
※P2にメンバーを掲載しています。
- 2 大人への呼びかけ**
子どもたちのこころを育む活動を広く募集し、大人全般に呼びかけをします。
- 3 子どもへの呼びかけ**
子どもから、こころの育みにまつわる体験談を募集し、エピソード集として子どもたちに呼びかけをします。

■紹介する事業

事業のねらい

全国で実践されている多彩な活動を多くの方々に知らせ、新たに参加したり、活動を改善したりするきっかけを提供します。

事業内容

“ほめる事業”に応募いただいた、全国の多彩な実践活動例を紹介するため、事例集とエピソード集を作成します

- 1 ノウハウ・事例集**
全国の多彩な活動のポイントや課題、成功の要素をまとめて紹介します。
- 2 エピソード集**
活動に参加された方が感じたこと、感動したこと」を紹介します。

■ほめる事業

事業のねらい

全国各地で実施されている活動の中から、他の活動の参考となるよい活動を表彰し、運動の元気づけをします。

事業内容

全国各地で実践されている、子どもたちの“こころを育む活動”を自薦・他薦を問わず、活動の大・小や個人・団体も問わず募集し、審査の上、表彰します。

- 1 応募できる活動**

下記の「3つの工夫」のいずれかが認められること

進める工夫
活動の対象や目的が明確で、進め方における工夫・努力がある

広げる工夫
ネットワークを作り、活動を広げるための工夫・努力がある

続ける工夫
活動を継続するための仕組み・工夫がある

- 2 表彰の内容**

全 国	全国大賞	団体	1件	表彰状・楯・賞金100万円
	個人賞	個人	若干数	表彰状・記念品
	奨励賞	団体	若干数	表彰状・記念品
ブロック	ブロック大賞	個人	若干数	表彰状・記念品
		団体	全国大賞が選出されたブロックを除き、各ブロックから1件	表彰状・楯・賞金30万円

■広める事業

事業のねらい

「こころを育む総合フォーラム 全国運動」に関心のある個人・団体どうしの交流を図り、運動のネットワーク化を進めます。

事業内容

「こころを育む総合フォーラム 全国運動」を広めることと同時に、表彰された活動を紹介し、個人・団体どうしの全国規模のネットワーク作り、情報交換の場として「シンポジウム」「全国キャラバン」を実施します。

- 1 シンポジウム**
(年1回東京開催予定)
表彰と事例の紹介、有識者メンバーとのパネルディスカッションによる情報交換の場としてシンポジウムを開催します。
- 2 全国キャラバン**
(年2～3ヶ所開催予定)
有識者メンバーが各地域を訪れ、実践活動を行う方々との交流を行います。

「こころを育む総合フォーラム シンポジウム」を開催しました

2009年3月20日、東京商工会議所東商ホールにて、「こころを育む総合フォーラム シンポジウム」を開催いたしました。シンポジウムでは、08年度に募集した、子どもたちの「こころを育む活動」の優秀事例を表彰しました。また、全国大賞を受賞した群馬県助産師会による模擬授業や、受賞者と有識者によるパネルディスカッションを行い、お集まりいただいた多くの方に、優れた活動を紹介することができました。「こころを育む総合フォーラム」では、活動の輪をさらに全国へ広げるための支援を続けて行きます。



「こころを育む」運動を広げるためのシンポジウム。多くの方にお集まりいただきました。

■「こころを育む総合フォーラム 全国運動」表彰式

子どもたちの「こころを育む活動」募集より、優秀事例として選出された奨励賞・ブロック大賞・個人賞・特別賞・全国大賞の表彰を行いました。各賞の審査・選考は、210件の応募事例より、子どもたちの「こころを育む活動」であること、「進める工夫」「広げる工夫」「続ける工夫」のいずれかが認められることを基準に行われました。表彰式では、全国からお集まりいただいた受賞団体・個人の方々に、表彰状や記念品などが贈られました。



総合的に審査・選考した結果、特に他の活動の参考となる優れた活動であるとして、群馬県助産師会が第一回全国大賞に選ばれました。群馬県助産師会の皆さんには、表彰状・盾・賞金が贈られました。



「こころを育む総合フォーラム」座長の山折哲雄より、審査講評として、子どもたちの「こころを育む活動」の現状や未来の展望についてお話しいたしました。



15の全受賞事例について、紹介と表彰を行いました。多くの受賞団体・個人と、関係の方々にもお集まりいただきました。

■群馬県助産師会の「いのちの大切さを伝える」模擬授業

全国大賞を受賞した群馬県助産師会による「いのちの大切さを伝える」出前講座の模擬授業が行われました。ブロック大賞を受賞した足立区立第十一中学校と、ヨミウリ・ジュニア・プレスの皆さんに授業を体験してもらい、意見交換を行いました。



群馬県助産師会の「いのちの大切さを伝える」出前講座は、手作りの教材を使った体験学習を主体とし、子どもたちが心で実感できるように工夫されています。最後には、子どもたちへ「生きてるだけで100点満点」というメッセージが贈られました。



針穴ほどの大きさの受精卵から始まる胎児の驚異的な成長を、手作りの胎児人形を抱くことで実感させます。人形は、月齢に合わせた本物の胎児の大きさ・重さを再現しています。



針穴ほどの大きさの受精卵から始まる胎児の驚異的な成長を、手作りの胎児人形を抱くことで実感させます。人形は、月齢に合わせた本物の胎児の大きさ・重さを再現しています。

■パネルディスカッション「進める、広げる、続ける」

「進める、広げる、続ける」をテーマに、受賞者、有識者によるパネルディスカッションを行いました。受賞団体からは、全国大賞を受賞した群馬県助産師会 会長・鈴木せい子さん、特別賞とブロック大賞を受賞した森と海の学校 理事長・岡村精二さんをパネリストに迎え、活動の実践について討論が行われました。



パネリストの鈴木さん、岡村さんからは、実践者ならではの「進める、広げる、続ける工夫」が語られ、有識者メンバーと熱のこもった意見交換が行われました。会場からも、多くの質問の手が挙がりました。



写真左より、パネリスト遠山敦子（パナソニック教育財団 理事長）、滝鼻卓雄（読売新聞東京本社 会長）、コメンテーター山折哲雄（国際日本文化研究センター 名誉教授）



写真左より、コーディネーター市川伸一（東京大学大学院教授）、パネリスト鈴木せい子さん（群馬県助産師会 会長）、岡村精二さん（森と海の学校 理事長）

■受賞者を招いて交流会を開催

シンポジウム終了後、受賞団体・個人の方々に招いて交流会を行いました。こころを育む総合フォーラム有識者メンバーも参加し、受賞者と活動について意見交換を行いながら、交流を深めました。こころを育む総合フォーラムは、こうした場が、連携や活動の輪拡大のきっかけになることを願い、今後も実践者のサポートを続けて行きます。



大切なものは「いのち」
「いのちの大切さを伝える」
出前講座は、オリジナルの
教材を使った体験学習や子
どもたちとの対話を通し
て、いのちの大切さを伝え、
子どもたちの自尊感情・自
己肯定感を培うことを目的
としています。

■活動領域 家庭 学校 地域 企業 ■3つのところ 自分に 他者に 社会に

子どもの自己肯定感を育む、「いのちの講座」 助産師による 「いのちの大切さを伝える」 出前講座

活動内容の紹介

子どもたちに、いのちの大切さを伝えるために

群馬県助産師会では、10人のメンバーが中心となり、主に群馬県内の小・中学校に出向き、子どもと保護者・教職員を対象に「いのちの大切さを伝える」出前講座を行っています。講座は、いのちのかけがえのなさ、大切さ、素晴らしさを伝え、子どもたちの自尊感情・自己肯定感を培うことを目的としています。助産師会会長の鈴木せい子さんは、子どもたちによる暴力、いじめ、自殺などの事件に心を痛み、いのちの現場にいる助産師として何かできないかと考えていました。そして講座を企画して群馬県に働きかけ、1997年に国の補助事業として、その後99年に県の単独事業として認められました。以来、助産師会メンバーが一体となって、12年間にわたり活動を続けています。



対象学年に合わせたプログラム
講座は、対象学年に合わせたプログラムで実施され、幅広い年齢の子どもたちの心に響く講座づくりが進められています。

心と体で実感させる 「生きてるだけで100点満点」

群馬県助産師会では、毎年100校以上に出向き、約10,000人の子どもと7,000人の保護者に講座を行っています。学校では道徳などの授業として行われており、授業参観や学年行事で実施されることも多く、親子で一緒に講座を体験することが原則です。講座は、「自分にとってひとつしかない、いのちのルーツをたずねる旅」として構成され、手作りの胎児人形などオリジナルの教材を使った体験学習を主体に、頭で理解するのではなく心で実感できるよう工夫されています。講座は、かならず「あなたにとって一番大切なものはなに？」という質問から始まります。子どもたちからは「家族」「自分」などの言葉と共に、「いのち」という答えが返ってきます。

【胎児の成長を体感】

針で小さな穴を開けた紙が子どもたちに配られます。その針穴ほどの受精卵が自分の大きさだったことを知らせ、次に月齢ごとの本物と同じ大きさ・重さの胎児人形を抱いてみることで、10ヶ月間の驚くべき成長を体感。誰もが持っている、成長する力を伝えています。



いのちのはじまりの大きさを発見
紙にあげた穴は、光に透かしてやっと見えるほどの大きさ。これが自分のはじめの大きさだと知らされ、子どもたちは講座に引き込まれます。



【生まれる瞬間を疑似体験】

袋状のお産模擬体験教材「うまれ〜る」(特許庁登録)を使用して、生まれる瞬間を疑似体験。「生まれてきてくれてありがとう」という言葉と共に、周りの応援を受けながら自分自身が持てる力を振りしぼり、がんばって生まれてきたことを伝えています。



生まれる子を応援
代表の子どもが生まれる瞬間を体験。見ている子どもたちは「がんばれ!」と応援します。



頭より心で感じる体験学習
アイデアが詰まったオリジナル教材。胎児人形は、本物と同じ大きさ・重さで精巧に作られており、抱いてみるといのちの重さを実感できます。

【胎児と自分の心音くらべ】

妊婦さんに協力してもらい、胎児と子どもの心音を聞き比べてみます。全力疾走したときのような胎児の早い心音に、子どもたちは自分も胎内で成長し生まれてくるために、多くの能力を発揮しながらがんばってきたことを知ります。



音の迫力に驚き
専門機器を使い、胎児の心音と、子どもの心音を聞き比べ。目の前にいる妊婦さんのお腹の中に、たしかに生きているいのちを感じる瞬間です。



視覚に訴えるオリジナル教材
お産模擬体験教材「うまれ〜る」は、特許庁に登録されたオリジナル教材。へその緒や胎盤まで、子どもにも視覚的にわかりやすく作られています。

【出産シーンをビデオ鑑賞】

実際の出産シーンをビデオで鑑賞します。実際の映像ならではの迫力の中で、つらそうな母親の姿、子どもの誕生を喜ぶ家族を観ることで、子どもたちは自分が母親と共に出産・誕生というすごいことをやり遂げたということ、多くの人々の願いがぎゅーっと送られてきた「世界でたったひとつの宝物」であることを実感します。

【助産師会からプレゼント】

子どもたち全員に、「いのちのはじまりの大きさカード」と、「生きてるだけで 100 点満点」という言葉を贈り、生まれてきたことのすばらしさや生きていることの大切さを伝えています。



生きてるだけで100 点満点
講座の最後に、かけがえのない、たった一つのいのちを大切にしてほしいと伝え、「生きてるだけで100 点満点」という言葉を贈ります。

自己肯定感を高め、 親子の絆を深めるきっかけに

講座を体験した子どもたちは、奇跡的に生まれた尊いいのちであること、家族に望まれて生まれてきたこと、自分自身が生きる力を持って生まれてきたことを実感し、自分の存在を肯定し大切に思うこと、そして他の人も大切にすることなどを学んでいます。いじめに悩んでいた子、自殺未遂や自傷行為をくりかえしていた子どもたちが書いた講座の感想文や手紙からは、「居場所が見つかった」「死ななくてよかった」などの言葉が見られます。保護者には、子どもが生まれたときの感動を再確認する機会となり、親子でお互いのかけがえなさを認め合い、関わりを見つめなおすきっかけになっています。

いのちの授業

小学校5年 女子

助産師さんが「死んだら命はこれっきり。」と言った。私は今まで何のために命はあるのだろうと思っていた。命は自分や家族、友だち、そして自分を必要としている人のためなんだと。これからは、命を大切にしよう。いつでもどこでも命を手放さずどんなときでも自分を大切にしたい今日のことは生きていくための勉強になった。

参加した子どもたちの声

中学生 女子

先生のお話を聞く前は「何でそんな事が言えるんだろう。『生きてるだけで 100 点満点』のはずないじゃないか」と思っていました。今まで私は自分の存在を 100 点とは一度も思ったことがなかったからです。むしろ 20 点か 30 点がいいところだと思っていました。家に帰っても本とゲームばかりで手伝いもろくにせず、学校では家に帰ったあとの自分の様子をさとりられないようにまじめそうに過ごしていました。

そんな汚い自分を先生は 100 点とおっしゃってくれました。先生のお話を聞いた後家に帰り、少し恥ずかしかったのですが母に「産んでくれてありがとう」と言ってみました。私はてっきり「ふーん」とか「どういたしまして」とそっけなく答えられると思っていたのですが母の口からこぼれた言葉は意外なものでした。

「産まれてきてくれてありがとう。」
台所に立っていたせいで母の顔は見えませんでした。鼻の奥がつんと目が熱くなりました。いつもしかられてばかりの私で、時々けんかもするけれど。私が母のことを大好きなように母も私のことを好きでいてくれたんだと実感できた瞬間でした。

先生のおかげでいつの間にか開いていた私と母の心のすき間を一気にうめることができました。ありがとうございます。これからも全国の子どもたちに命の大切さについて教えてあげてください。

保護者の感想文

講座を聞いていて、沢山の思いがこみ上げてきて涙がいっぱいでした。今回で3回目になります。一回目の時は涙が止まりませんでした。二回目もやはり感動で涙が止まりませんでした。そして今回も…です。生まれてきてくれただけで、いまこうしているだけで、なんて幸せなことだろうかという気持ち忘れそうになってしまう時、夜、寝顔をさすりながら「こんな優しい子はいないよね…それなのにお母さんわかってあげられなくてごめんね」といいながら寝ているわが子の頭をなでてしまいます。日々の生活を振り返らせていただきながらも未来に向かい、光の筋が見えるような本当に素晴らしい講座だったと思います。1 人でも多くの子どもや親たちに聞かせたい講座だと思います。



保護者が子どもの存在を見つめなおす機会にも
講座は、子どもたちと保護者が一緒に体験することを重視しており、08 年度の保護者参加率（小学校）は約66%でした。子どもが生まれたときの感動を思い出し、涙する保護者も。

3 つ の 工 夫

進める工夫

心に響く講座づくり

いのちの大切さを伝え、自尊感情・自己肯定感を培うことを目的に、講座を行っています。そのために、講座の前後に意識調査を行ったり、教育学の専門家の分析を受け、常に講座内容の向上を目指しています。毎月 1 回スキルアップのための会議を開き、講座内容や教材の見直しを続けています。実施場所である学校に理解と協力を得るために、事前にも一度出向いて念入りな打ち合わせを行っています。

広げる工夫

毎年 100 校以上で実施

助産師会の組織力を活用し、複数の助産師で毎年 100 校以上に出向いています。2007 年度は群馬県を中心に 114 校へ出向き、子どもたちや保護者、教師などを含む 16,032 人が講座を体験しました。講座を広めるために他県助産師会と連携し、ノウハウを伝えるための研修会や講座の実施、教材の提供などを行っています。教育委員会や学校、PTA と共通理解を深めるために情報の交換をするなど、連携を進めています。

続ける工夫

公的事業として活動を持続

教育現場で、民間の力を活かした活動を継続するためには、公的事業化が大きな力となっています。群馬県に働きかけた結果、1997 年に国の補助事業として、その後 99 年に県の単独事業として活動が認められました。その後、太田市・みどり市でも公的事業化が図られています。助産師のいのちの大切さを伝える出前授業が、県や市の公的事業と認められた全国で唯一の事例です。そのため、講座は学校の授業として、道徳や総合学習、人権教育の枠で行うことが可能になり、多くの子どもと保護者の参加を実現しています。県をはじめ、学校や PTA の協力、また助産師会メンバーの組織力で、活動は 12 年間継続しています。

所在地：〒373-0018 群馬県太田市丸山町250-7
TEL/FAX：0276-37-5198 / E-mail：s.mide@jeans.ocn.ne.jp
代表者：鈴木せい子



大型カヌーにも挑戦
小学生と中学生を対象に、客船を利用して行われる7泊8日の体験航海「ジュニア洋上スクール」。高校生・大学生指導員が子どもたちの世話を担当します。指導員と共に、美しい海で大型カヌーに挑戦。

■活動領域 家庭 学校 地域 企業

■3つのところ

自分に 向かうところ
他者に 向かうところ
社会に 向かうところ

家族や仲間の大切さを、心身で学ぶ野外研修 「子ども自然体験キャンプ」 「ジュニア洋上スクール」事業による “親からの手紙”と青少年指導者の育成

活動内容の紹介

元気な子どもと青少年指導者の育成を目指して

森と海の学校は、冒険心あふれる子どもと青少年指導者の育成を目的に、岡村精二さんが立ち上げたNPOです。1984年の開校以来、「子ども自然体験キャンプ」などの野外研修の実施を25年間続けています。研修のテーマは、「親からの手紙を通して、親が子に生き方を教える」ことであり、研修を通じて子どもたちが「自分にとって親とは何なのか」「どのような生き方をしなければならないのか」と考えることができるよう、「親からの手紙」などの独自プログラムを行っています。また、研修の企画・運営は高校生・大学生指導員中心に行われており、青少年の社会参加の場ともなっています。



25年間続く「子ども自然体験キャンプ」
08年に熊本県阿蘇で行われた、第25回「子ども自然体験キャンプ」。
100人を超える子どもたちと、青少年指導員ら活動を支えるスタッフ。

活動の目的

- 1 家族の絆を深める。
- 2 高校生、大学生に社会参加の場を与え、青少年指導者を育成する。
- 3 子どもたちに異年齢交流(小学1年生から高校生)と仲間づくりの場を与える。
- 4 子どもたちに自然の中で遊び、友だちと協力して物事を達成する喜び、仲間と遊ぶ楽しさ、家族(命)の大切さを感じる体験をさせる

自然の中で、異年齢交流と仲間づくりを

森と海の学校では、毎年「子ども自然体験キャンプ」や「ジュニア洋上スクール」などの野外研修を行っています。「子ども自然体験キャンプ」は、小学生を対象にした4泊5日のサマーキャンプ、「ジュニア洋上スクール」は、小学生と中学生を対象に客船を利用して行われる7泊8日の体験航海で、共に高校生・大学生が指導にあたります。研修中は、異なる年齢を交えた縦割り班編成での共同生活です。異年齢交流を通して、子どもたちは自然に協力と思いやりの心を学び、絆を深めます。研修終了後も、手紙などで交流を続ける子どもたちがたくさんいます。

「子ども自然体験キャンプ」の主なプログラム

■親からの手紙

保護者が、それぞれの子どもにかける願いや思い出を綴った手紙を送ります。子どもたちはその手紙をひとり読み、翌日感想文を書きます。
(くわしい内容は次頁)

■ライフサイクルプランの作成

人生の夢や目標を見つけ、その実現には各年代で何をすべきかを考えながら人生設計図を作成。目標を明確にし、それに向かい努力することの大切さを学びます。

■ハイキング 海水浴 野外炊飯

など

子ども自然体験キャンプ



自然の中で仲間づくり
4泊5日の研修中は、登山や川遊びなどの自然体験や、「親からの手紙」プログラムなどが実施されます。縦割り班生活は、貴重な異年齢交流の場にも。

ジュニア洋上スクール



自分の生き方を考え、学ぶ機会に
毎朝、クラーク博士の言葉「ボーイズ ビー アンビシャス」原文を唱和。子どもたち全員が暗唱できるようになります。



渡航先で行われる交流会で、練習の成果を披露！



多彩なプログラム

研修は、沖縄や韓国で実施されてきました。渡航先での歴史的遺産の見学や、文化交流も忘れられない体験に。



親の愛を知り、生き方を学ぶ 「親からの手紙」

野外研修で必ず行われるプログラムが、「親からの手紙」です。保護者は書き方について事前に説明を受け、研修中に届くように子どもたちへ手紙を送ります。手紙は、子どもたちが共同生活に慣れ、家族や家を思い出す頃に手渡され、ひとりで読むように伝えられます。自分への期待や願い、生き方のアドバイスなどが綴られた愛情あふれる手紙に、ほとんどの子どもたちが涙を流します。翌日、子どもたちは手紙の感想文を書き、それが今度は保護者へ届けられます。手紙の交換が、家族の存在を見つめなおし、絆を深めるきっかけになっています。

母からの手紙

理恵様へ

元気ですか？ そちらの夜は冷えるでしょうね。
この研修に参加し、自然の中で自分達の力で生活しているあなたの姿を想像し、とても頼もしく思っています。
あなたは中学生になってずいぶんたくましくなった様に思えます。いろいろな経験をさせていただいたお陰、たくさんのお友達のお陰でしょうか。

母さんも中学生時代の頃の事は、今でも鮮明に想い出されます。友達との会話、先生に叱られた事など。
その時期をあなたが過ごしている事を思うと、時間がたつのは早いものだと思います。

父さんや母さんは、あなたにたくさんの夢をいんでいます。結婚もその中のひとつです。

私が父さんと結婚してよかったと思う事は、あなたと幸枝に会えたことです。本当に偶然に巡り会えたんですからね。

母さんは、あなた達の顔を見れば小言を言っているように見えるかもしれませんが、あなた達は、母さんにたくさんの希望を与えてくれています。

母さんだけでなく、家族みんなにそれぞれの希望を。

だからあなたにも、新しい家庭を築いて母になってほしいと思います。

あなたはもう13才、そんなに遠い話ではなさそうですね。

この研修を終えて、またチョッピリ成長した理恵に会えるのを楽しみにしています。

瀧口 薫・真理子

涙でかすむ手紙

夜、ひとり懐中電灯の明かりで手紙を読む子ども。多くの子どもたちが、涙を流しながら何度も読み返します。



子どもの感想文

希望と勇気を与えてくれた母からの手紙

滝口理恵 中学一年生（当時）

昨日の夜、初めて母から手紙をもらいました。「滝口理恵様」という母の字を見て、私はとても感動しました。私のことを初めて様と書いてくれて、読む前から目に涙がたまってきました。

手紙の中には、母が私達のことをどんなふうに思っているか、元気でキャンプ生活を過ごしているか、など、母の気持ちがいっぱいにつまっていました。ふだんいっしょに生活している時は、「小言ばかり言うてうるさいなあ」とか、母にやつあたりしていました。時には「お母さんなんか大きい」と思うこともありました。しかし、この手紙を読んで、私は前よりも母のことが好きになりました。大大好きになりました。こんな私を一生懸命育ててくれ、ここまで成長できたのも、母のおかげだと、しみじみ心の中でそう思いました。今からすぐ母に会って、「ありがとう」

と言いたいです。とても感謝しています。

私はこの手紙を読み終わる時には、もう、目からたくさんの涙がこぼれおちていました。明日からは、母にも、みんなにもめいわくをかけず、一秒でも大切に生きていこうと思いました。母のこの手紙は、私にたくさんの希望と勇気をあててくれました。私もこの手紙にこたえて、一生懸命がんばろうと思います。そして、この手紙は、一生、私の大切な宝物です。

『手紙でつむぐ親子のきずな』（岡村精二著・創元社）より



感想文を家族へ

手紙を読んだ翌日、子どもたちは感想文を書きます。その感想文が今度は保護者へ届けられます。

活躍の場を与えることで育つ、 学生指導者たち

森と海の学校が行う野外研修は、子どもたちに異年齢交流や家族の絆を深める体験を提供すると共に、貴重な青少年指導者育成の場ともなっています。キャンプ地の下見や交渉をはじめ、研修の企画・運営は学生指導員に任されています。100人以上の子どもを預かるという大きな仕事を任された高校生や大学生たちは、その責任を果たそうと努力し、指導者として成長しています。多くの指導員は、小・中学生のころ研修に参加し、感動を体験した子どもたちです。研修に参加した子どもたちは、近い年齢の指導員が日々活躍する姿に憧れ、「彼らのようになりたい」と思うようになります。こうして指導員が自然に代替わりし、常に多くの学生が活動を支えています。



青少年指導員が、子どもたち憧れの存在に

子どもたちは、親や教師と違い、自分たちとあまり年齢が変わらない高校生・大学生が活躍する姿に驚き憧れ、自分もいつかはと夢を抱きます。



規律を守る生活を指導

団体生活を行う上での態度やルールについて子どもたちに指導を行うのも、指導員の役割。

子どもを守る指導員の絆

100人を超える子どもたちの世話を協力して行う、青少年指導員たち。



3つの工夫

進める工夫

家族の絆を深めるプログラム

冒険心あふれる子どもと青少年指導者の育成を目指して、野外研修などの活動を25年間継続しています。研修では、「親が子どもに生き方を教える」機会の提供を目的として「親からの手紙」プログラムを実施しています。保護者に手紙を書いてもらうことを研修の参加条件とし、手紙の意義や内容を理解し協力してもらうために、保護者向けの事前研修会を行っています。また手紙は研修3日目の夜に渡し、ひとりで何度も読ませるなど、子どもの心にしっかり届くよう工夫しています。

広げる工夫

7,000人以上の子どもが感動を体験

現在までに、「子ども自然体験キャンプ」は2,200人以上、「ジュニア洋上スクール」は2,700人以上の子どもが参加しました。また「親からの手紙」プログラムは、青年会議所や中学校での宿泊訓練などでも実施し、7,000人の子どもたちが体験しています。研修実施には、教育委員会やPTAなどの協力を受け、各団体との連携を進めています。事前研修会を行うなど、地域や保護者の理解と信頼を得るための取り組みを続けており、参加者は全国に広がっています。

続ける工夫

若い指導者たちが活動の原動力

企画・運営作業の多くを高校生・大学生指導員が行っています。その活躍を見た子どもたちが彼らに憧れ、やがて指導員になるというサイクルが25年間にわたる活動を支えています。指導者体験を経て保育士や学校教員を目指す学生も多く、数名が現在小学校教師として活躍しています。地元新聞やテレビ局の取材に協力することで活動内容が広く紹介され、広報・普及活動に役立っています。複数回参加するリピーターは3割を超えており、親子二代にわたる参加も増えています。



島の自然を体験
あじ島冒険楽校のプログラムは、恵まれた自然を活かした体験学習を主体としています。シーカヤックもそのひとつ。ひとりで工夫しながら船を操り、網地島の海を体験します。

■活動領域 家庭 学校 地域 企業 ■3つのところ 自分に 他者に 社会に 向かうところ 向かうところ 向かうところ

限界集落へ「未来の大人たち」がくれた元気 「昔の子どもたち」から 「未来の大人たち」へ 「島の夏休み」を伝えたい

活動内容の紹介

高齢化が進む網地島を救うために

網地島は、宮城県の牡鹿半島の先端西側にある、自然に恵まれた美しい島です。遠洋漁業や捕鯨が成り立たなくなったことなどから、急激な人口流出が進み、高齢化の問題を抱えていました。できることから始めようと島の高齢者が集まり、2004年に立ち上げたのが、子どものための自然体験楽校、あじ島冒険楽校です。冒険楽校では、「昔の子どもたち」（島の高齢者）が先生となり、「未来の大人たち」（島の小中学生）に、島伝統の魚釣りや懐かしい昔の遊びを指導し、昭和30年代の「島の夏休み」を体験させる一泊二日から二泊三日までのプログラムを行っています。「未来の大人たち」の心を育む活動を通じて、「昔の子どもたち」が網地島の価値を再認識し、誇りを取り戻して島を守ろうとする意欲を高めること、そして島内外の協力を得ながら島の再生を図るために、活動を続けています。

自然を体感する「昔の遊び」プログラム

あじ島冒険楽校は、2004年より、夏休みの時期に年2～3回ずつ実施され、400人を超える子



資源を活かしたおもちゃ作り
島に豊富にある竹を使った竹とんぼ作り。何度も飛ばしてみても自分で考え、バランスを調整する作業をくり返します。うまく飛ぶ竹とんぼを作ろうと子どもたちは真剣。



伝統の釣りに挑戦
島伝統の釣り「あなご抜き」を体験。普段魚を食べない子どもでも、自分で釣った魚はよるこんで食べます。

どもたちが体験しています。活動中には、多くの自然体験プログラムが行われます。「ながぐつ先生の網地島植物教室」は、今から40年前に島の網長中学校で教師をしていた「ながぐつ先生」こと高橋和吉先生の指導で、島の自然について学び、植物を使った遊びなどを体験するプログラムです。島伝統の魚釣り「あなご抜き」では、手作りの竹竿で魚を釣り、自分が釣った魚を浜で焼いて、昼食に食べる体験をします。さらに、島にふんだんにある竹を使った竹鉄砲や竹とんぼ作り、流木や貝殻を使ったクラフト教室、シーカヤック体験や海水浴など、子どもたちは網地島の自然を十分に感じられるさまざまなプログラムを体験します。

貴重な世代間交流の場にも

自然体験に参加した子どもたちは、網地島の豊かな自然に触れながら昔の遊びを体験することで、多くの感動と実感を得ます。また冒険楽校は、高齢者との交流や、異年齢の友達作りができる貴重な場ともなっています。多くの高齢者が活動に参加し、子どもたちとの触れ合いを通して、未来への希望を取り戻しています。「子どもたちが将来ボランティアとして戻ってきてくれたら。そしてまた次の世代の子どもの世話をする、そんな世代交代が見られたら」という夢も生まれました。島の資源を活かして、子どもたちの豊かな感性を育むと共に高齢者を元気づけ、地域を未来へつなげる取り組みです。

参加した子どもたちの声

島のおじいさんとおばあさん、いっぱいありがとうございます。来年もまた行きます。

網地島はいいところなので、お嫁にきたい。

いつも抽選にもれて参加できなかったけど、あじ島冒険楽校に参加できる最後の中学2年生になって、4年ぶりに参加できました。4年前はホームシックになって職員室で泣いてしまい、夜遅くまで島の方に優しくしてもらいました。大きくなった自分を島の方に見てもらうことができてよかった。

所在地：〒986-2525 宮城県石巻市長渡浜姥婆15
TEL：0225-49-2126 / E-mail：marukin@mbj.nifty.com HP：http://plaza.rakuten.co.jp/ajisima
代表者：小野 勝吉 / 担当者：阿部 欽一郎

自然体験教室の主なプログラム

- ながぐつ先生の網地島植物教室
- 島伝統の魚釣り「あなご抜き」
- 竹鉄砲・竹とんぼ作り教室
- 流木や貝殻を使ったクラフト教室
- 網地島の海を体験（シーカヤック・海水浴）
- 海女が教える郷土料理体験
- 島の伝統芸能「獅子踊り」体験
- 廃校になった網長中学校での肝だめし など

島を活気づける活動

子供たちは、自然の中でさまざまな遊びを体験するだけでなく、高齢者や異年齢の仲間との交流を深めています。また島の高齢者も、活動を通して子どもたちに元気づけられています。



3つの工夫

進める工夫

島外の大人と子どもたちに網地島について理解してもらおうと共に、島の自然や昔の遊びを通して子どもたちの心を健やかに育てることを目的として、自然体験教室を行っています。島の自然を活用した遊び体験では、子どもたちの発想や実感を活かし、自主性や創造性を引き出す工夫をしています。また、同行の保護者にはプログラムに積極的に参加してもらい、家族の絆を深める場を提供しています。

広げる工夫

島の多くの高齢者が活動に協力しています。漁師さんが魚釣りの指導を行ったり、海女さんが郷土料理の指導を行ったりと、高齢者が島での生活経験を活かし、講師やスタッフとして活躍できる組織作りをしています。子どもたちとの交流により、島の住人たちが島への誇りや元気を取り戻すなどの効果もあり、地域を巻き込んだ活動が広がっています。

続ける工夫

子どもたちの相談相手として、大学生ボランティアが参加しています。毎年、学生間で活動内容の引継ぎや後任の手配などが行われており、若いボランティアスタッフが代替わりしながら毎回活動を支えています。教室での子どもたちのようすなど、ブログで随時情報発信し、保護者への報告や広報活動に役立っています。



交流の場「花の駅」
地域の老人会が自分
たちで育てた花を、登
校する生徒に手渡す
「花の駅」。花と「あり
がとう」という言葉の
交換を通して、中学生
と高齢者の「相棒」関
係が育っています。

■活動領域 家庭 学校 地域 企業

■3つのこころ

自分に 他者に 社会に
向かうこころ 向かうこころ 向かうこころ

学校を拠点に、育ち合う地域づくりを 花むすび「中学校を拠点とする“地域づくり” “学校づくり”“こどもほめ育て”の 地域ぐるみの取り組み」

活動内容の紹介

地域の目を子どもに向けるために

足立区立第十一中学校 開かれた学校づくり協議会では、地域・学校・PTA が連携し、「地域づくり」「学校づくり」「こどもほめ育て」を三位一体として進める活動に取り組んでいます。2001 年に「通園・通学路花むすびネットワーク」を組織し、花と「ありがとう」という言葉の交換を通して、子どもと学校に対する地域の関心を高め、また子どもの豊かな心を育てることを目指す「花の駅」活動を始めました。またこれらの活動で培った、「子どもの自尊感情の育成と高齢者の生きがい作りは同根の課題であり、中学生と高齢者は相棒となってその課題に取り組むことができる」との考えから、大人と子どもが「ほめ育ち合う」場所として、08 年より「土曜音読道場」を開催しています。



花の苗づくり
人と人をむすび、地域をむすぶための「花」を育てることも大切な作業です。「花むすびの日」に、花の苗づくりを行い、季節の花を絶やさない努力をしています。



通学路にも花を
通学路を花で彩ることも、
花を利用した地域づくり
活動の一環です。

活動の目的

- ① 「花」と「ありがとう」で、人と人をむすび、「ふるさと」をむすぶ。
- ② 大人と子どもの「ほめ育ち合い」で、互いに「自尊感情」を高め合う。
- ③ 地域ぐるみの言語環境づくりで、子どもの「言語力」と「豊かな心」を育む。
- ④ 高齢化する地域社会の「活性化」と、高齢者の「生きがいづくり」に資する。

大人と子どもが「ほめ育ち合う」地域へ

協議会の活動は、足立区立第十一中学校の経営に組み込まれており、総合学習や部活動の一環としても活用され、多くの生徒が参加しています。「花を育て、教室に贈るのが楽しい」などと、楽しみながら参加する高齢者も増えています。近年では、生徒会を中心に、生徒たちが自主的に地域へ「お返し」を発信するようになりました。異世代協働のさまざまな活動を通して、子どもたちは地域から見守られていることを実感しています。



言語力を育む土曜音読道場
毎週土曜日に、老人会のメンバーが学校へ出向き、生徒たちと並んで音読を行っています。参加者を増やし、力を入れている取り組みです。

協議会が行っている主な活動

■花の駅

地域老人会が花を育て、中学校全クラス分の花束を作り、隔週月曜日の朝に登校する生徒に持たせます。学校に集まった花束は、各クラスの「花むすび係」によって教室に飾られます。

■土曜音読道場

毎週土曜日の午前中に、地域老人会のメンバーが「音読奉行」や「お接待」として中学校へ出向き、希望生徒と机を並べて一緒に詩や笑話、古典、新聞などを音読し、茶話を楽しみます。

■はがき一葉のありがとうコンクール

地域の小・中学生を対象として、はがきに家族や先生、地域のお世話になった人への「ありがとうの思い」を綴り、地域で共有するコンクールです。

■地域株

地域の賛同者に 1 株 2,000 円の「地域株」を発行し、寄付金を募る取り組み。「地域株」購入者には活動成果報告が行われ、活動資金を集めるだけでなく、地域住民が「株主の関心」を持って活動を見守り支援する機会になっています。

参加した子どもたちの声

「花の駅」から贈られた花は、クラスの雰囲気落ち着かせ、勉強にも集中させてくれる。花を通して私たちが結んでくれる人たちの気持ちを無駄にしない。
(生徒会役員)

日本史の教科書一冊を音読し終えて 2 回目に入った。「読みがなめらかになったね」と参加者からほめられた。これから教科書十ぺん音読に挑戦する。
(土曜音読道場参加の一年生)



貴重な異世代交流
花を通して生まれた、中学生と高齢者の貴重な交流。ここから多くの活動が生まれ、地域の輪が広がっています。

3つの工夫

進める工夫

中学校を拠点に、「地域づくり」「学校づくり」「こどもほめ育て」に地域ぐるみで取り組んでいます。「まちを楽しくする創意工夫」と「遊び心」を重視して、オリジナルの活動や仕組み作りを行っています。「花の駅駅長」「音読奉行」など、ボランティアのネーミング等にも遊び心を取り入れ、子どもも大人も楽しみながら参加できるよう配慮しています。

広げる工夫

PTA や老人会などとの連携により、地域の大人、特に高齢者が多く活動に参加しています。活動のための組織形態を、幅広くまた上下関係が希薄な「アメーバ状」にすることで、参加者の責任感とモチベーションを高めています。中学生と高齢者の「相棒」ネットワークを拡大し、さらに高齢者を巻き込む活動を目指しています。

続ける工夫

「花」からさらに発展させ、農業や食育などをテーマに、地域で子どもと大人がほめ育ち合える新たな活動を考えています。「地域株」などの仕組みを活用し、活動資金と共に、地域の関心や協力を得るための取り組みを続けています。

所在地：〒120-0013 東京都足立区弘道1-38-15 足立区立第十一中学校内
TEL : 03-3849-4540 / FAX : 03-3887-8192 / E-mail : ichikawa0835@key.ocn.ne.jp
代表者：遠藤 光彦 / 担当者：市川 昭



感動体験をミュージカルに
マーレでは、歌を中心に、さまざまな人々との交流や体験学習を行っています。歌と食育を組み合わせた「食育ミュージカル」もそのひとつ。子どもたちは土作りから始めて野菜を育て、食べた感動をミュージカルに仕上げて発表します。

■活動領域 家庭 学校 地域 企業

■3つのこころ

自分に 他者に 社会に
向かうこころ 向かうこころ 向かうこころ

歌声で地域をむすぶ、多彩な体験交流活動 歌声体験交流活動

活動内容の紹介

歌を通して子どもの居場所づくりを

少年少女合唱団マーレは、公立学校の完全週5日制実施をきっかけに、誰もが楽しめる歌を通して子どもたちの居場所をつくろうと、高校で音楽教師をしていた赤谷尚実さんが中心となり立ち上げた合唱団です。団名のマーレとはイタリア語で海の意味で、子どもたちの海のように広い心、深い思いやりの心を育てたいという願いが込められています。マーレでは、共に歌うこと、美しい響きを共有する喜びを子どもたちに感じてもらうことを目的に、歌だけにとどまらず、さまざまな「歌声体験交流活動」を行っています。地域の多くの個人や団体が活動に協力しており、バラエティに富んだ体験プログラムを企画しています。



交流を通して思いやりの心を育む
病院の子どもたちに笑顔を届ける道化師、クリニックラウンを体験。多くの団体や地域の人々が協力し、交流と体験の場を提供しています。



歌で広がる地域の輪
歌を通して、団員の親世代や中・高校の合唱部などとも、交流が広がっています。



マーレが行っている主な活動

■実体験の感動を歌うミュージカル

土作りから始め有機野菜を育て、その体験や野菜のおいしさを表現するミュージカルを作り、発表しました。

■異世代グループとの交流コンサート

マーレ団員の親世代、祖父母世代のコーラスクラブを設け、3世代合同のジョイントコンサートを行っています。また地域の中学校、高校の合唱部などとも交流しています。

■歌を通してさまざまな人たちと交流

知的障害がある人たちと一緒にコンサートを行ったり、老人福祉施設で出前コンサートをするなど、歌を通して多くの人と交流する機会を設けています。

■歌以外のバラエティに富んだ活動

地域の協力で、家族で参加するヨガ教室、敦賀特産の和紙を使った灯籠作り、ちまきや七草がゆを作る食育活動などを行っています。

地域に密着した活動で、地域社会を育てる

マーレは、地域を巻き込んだ多彩な活動で、子どもたちの居場所にとどまらず、地域づくりや家族コミュニケーションの場としても活躍しています。子どもたちは、多くの人との交流などさまざまな体験を得て、豊かな感受性を育み、地域や環境へも視野を広げています。地域の人たちが得意なことを持ち寄り、子どもたちに伝えたいと積極的に活動に参加し、ボランティアの輪が広がっています。団体、個人を交えた多くのコミュニティが生まれ、子どもたちを見守る地域社会が育っています。



自然や環境への理解を
さまざまな活動を通して、食や自然環境の大切さも伝え、子どもたちの視野を広げています。



参加した子どもたちの声

学区を越えた友達がたくさんできて、いろんな話できて楽しい



小さい子のお世話をし
てあげるのが楽しい。
妹みたいでかわいい

学校の帰り道でいつも会う
おじさん（子ども見守り
隊）がいるけど、あんなこ
と（手品）ができるとは思
わなかった。今度教えても
らう約束をした。

いろんなことができる
ので飽きないし、絶対
にやめたくない

3つの工夫

進める工夫

歌を中心に、地域を巻き込んださまざまな活動を行うことで、子どもたちの視野を広げ、また温かい地域社会を構築することを目指しています。活動のようすは写真で記録し、保護者と情報を共有しています。ミュージカルの題材には、子どもたちの活動体験のほか地元の歴史なども取り入れ、地域への興味や愛情を育てる工夫をしています。

広げる工夫

地域の音楽活動団体をはじめ、子ども見守り隊や環境保護団体、国外からの児童親善使節団など、さまざまな団体と連携した活動を進めています。敦賀青少年合唱連絡協議会の設立により、中学校、高校との交流も可能になりました。保護者や高齢者が楽しんで参加できるような活動も企画しています。

続ける工夫

地域団体やボランティアとの連携を密にし、子どもたちが継続的に豊かな体験活動を行えるよう地域の基盤づくりを進めています。ホームページで活動内容を紹介するほか、活動報告書を地域に広く配布し、広報活動を行っています。

所在地：〒914-0124 福井県敦賀市市野々6-2-2 第二早翠幼稚園内
TEL：0770-21-0002 / FAX：0770-21-0022 / E-mail：mare@samidori.ed.jp HP：http://www.samidori.ed.jp/mare/index.html
代表者：赤谷 尚実 / 担当者：徳本 範子



学童保育と料理教室を融合
「キッズ・キッチン」は、学童保育と料理教室を組み合わせたプログラム。従来の料理教室とはまったく異なり、すべて子どもたちが主体です。子どもたちは協力し合い、予算内で献立作り、商店街での買い物、料理、後片付けまでを行っています。

■活動領域 家庭 学校 地域 企業

■3つのところ

自分に 他者に 社会に
向かうところ 向かうところ 向かうところ

食育を通した、子どもを見守る地域づくり 商店街の空き店舗を活用し、 食育をテーマとした小学生の 居場所づくり「キッズ・キッチン」

活動内容の紹介

空き店舗を活用した食育と交流の場

ふれあいネットひらかたは、2005年に野村由賀里さんが立ち上げた、子どもの食育と親の子育てを応援するNPOです。昼間は子育て支援施設「食育ステーションまきの」で、子育て中の母親のための食育料理教室を、放課後は小学生のために学童保育と料理教室を組み合わせた「キッズ・キッチン」を運営し、食育の啓発活動や交流の場の提供を行っています。活動場所には、地域住人が集まりやすく、また近年活気がなくなっていた地元商店街の空き店舗を活用しています。「地域の子どもは地域で守る」を合言葉に、商店街の中に親子や子どもの居場所を作り、地域や商店街が一体となって子育てを支援する地域社会の構築を目指して、さまざまな活動を続けています。

すべて子どもが主体の「キッズ・キッチン」

「キッズ・キッチン」は、公立小学校の学童保育が夕方6時まで、4年生までの預かりであるのに対し、時間延長と6年生までの預かりを求める保護者の要望を受けて、07年に誕生したプログラムです。6年生までの小学生を夜7時まで預かり、



3歳から参加できる教室も
ふれあいネットひらかたでは、幼児や親子向けの料理教室も開催しています。写真は、幼児向け教室。



空き店舗を活用した子どものための料理室
商店街の空き店舗を改装して料理室を作りました。調理台の下に踏み台を設置したり、子供用調理器具を備え、子どもたちが安心して安全に料理できる工夫をしています。

栄養士や料理研究家であるスタッフが特別な料理教室を行っています。「キッズ・キッチン」の特長は、子どもたちが主体となり、予算内で献立づくり、商店街での買い物、料理、後片付けまでを行うことです。子どもたちは、友達や商店街の人たちとコミュニケーションを取りながら、段取りの基礎やマナーを学び、自信や達成感を得ることができます。プログラムは毎週水・土曜日に実施され、学校の長期休暇間は保護者と参加するイベントなども行われています。

子どもの食育が地域の活性化にも

小学校6年生までの子どもたちを夜7時まで預かり、また料理教室という形で夕食の場を提供することで、保護者の要望に応えた子どもの居場所づくりを実現しています。子どもたちは、料理の楽しさを体験することで好き嫌いを減らし、さらに活動を通して、物事に対する計画性や経済観念、コミュニケーション力などとても多くのことを学んでいます。また活動の場である商店街には自然と子どもたちを見守る空気が生まれ、地域の活性化にも貢献しています。

参加した子どもたちの声

- 家ではピーマンやトマトを食べないけど、自分で料理したらおいしくて食べることができるようになった。
(小学校2年男子)
- キッズ・キッチンに通って1年、いまでは料理のレシピを見れば自分で何でも作れるようになった（小学校6年女子）
- キッズ・キッチンに通うようになってから、家で料理したり洗濯物をたたんだり、お母さんのお手伝いをするようになった。
(小学校3年女子)
- 大きくなったら農業をしたい。とれたての野菜は新鮮でとてもおいしい
(小学校5年男子)



地域の活性化に
活動の場である商店街にも、子どもたちを見守る雰囲気。

学校の長期休み期間に行われるイベント

- 農業体験教室
- トールペイント教室
- 子ども手ごねパン教室
- 絵手紙教室
- 外国料理講習会
- など



親子で参加できる農業体験教室
地域農家の協力を得て、植ええから野菜を育て、収穫した野菜を調理して食べるまで体験。親子で楽しみながら、野菜の成長や栄養について学びます。



3つの工夫

進める工夫

食育をテーマに子どもの居場所を作り、また地域全体で子どもたちを見守る環境づくりを目指しています。料理室には、火を使わないIHコンロを設置したり、子ども用包丁などの調理器具を揃え、子どもが安心して料理を体験できる設備を整えています。親子料理教室など保護者参加型イベントを行い、家族の絆を深める場を提供しています。

広げる工夫

商店街のそば屋店主を講師に招いてそば打ち体験教室を行ったり、農家の協力で農業体験教室を行ったりと、地域と連携した取り組みを進めています。また、スタッフが地域の小学校や幼稚園で食育学習会を行ったり、企業のイベントに協力したりと、食育をテーマにネットワークを広げています。

続ける工夫

月会報、チラシ、メール、ホームページによる告知などで広報活動を行っています。活動のようすは、スタッフが随時ブログに投稿し、新鮮な情報を発信しています。地域の世代を超えた結びつきを目指し、子育て親子や小学生に限らず、高齢者や男性など、年代や目的に合わせた料理教室の開催も計画しています。

所在地：〒573-1144 大阪府枚方市牧野本町2-19-2 長村ビル1階
TEL/FAX：072-397-2111 / E-mail：yu715jp@yahoo.co.jp HP：http://www.shokuiku-station.com/
代表者（担当者）：野村 由賀里



遊びと体験の場
子供たちに、さまざまな遊びや体験の場を提供する「どうようひろば」。写真は小物作りコーナーでのにおい袋作り。地域の「物づくり名人」らが指導にあたります。

■活動領域 ① 家庭 ② 学校 ③ 地域 ④ 企業 ■3つのこころ 自分に 他者に 社会に 向かうこころ 向かうこころ 向かうこころ

学校を、子どもと大人が集う「ひろば」に「どうようひろば」

活動内容の紹介

学校を拠点に大人と子どもの居場所づくりを

KSVN（嘉瀬小学校ボランティアネットワーク）は、嘉瀬小学校の施設開放事業の受け皿として、事業の企画運営を行っているボランティア組織です。30数名の常時スタッフと嘉瀬小学校教職員、地域特別スタッフ、6年生子どもスタッフが所属しており、「学校に“大家族”をつくり、そこを核とした活動で“地域ぐるみの子育てを”の教育風土を高める」ことを目的に、さまざまな活動を行っています。2002年に、学校を拠点に子どもの居場所と大人の居場所を組み合わせた遊びと交流の場、「どうようひろば」を立ち上げました。自治会や公民館、PTAなど地域の支援を得て、毎月第一・第三土曜日の開催を基本に、6年以上にわたり活動を続けています。



本の楽しさを知る読み聞かせコーナー
「どうようひろば」にはさまざまなコーナーがあり、子どもたちが好きなものを選んで自由に参加できます。読み聞かせコーナーは、子どもたちが本の楽しさを知る機会に。



多彩な遊び体験
ペンシルバルーン作り。地域企業がボランティアとして協力しています。

- ① 子どもたちに不足している遊びや、本物にふれる体験活動の場を提供する。
- ② 異学年や大人と子ども、大人同士がふれあい、育ち合う場(大家族)を提供する。
- ③ 人間関係が希薄化した大人社会に、子どもの手本となる協働の場を提供する。
- ④ 学校と地域(公民館も含む)の良好な関係づくりに寄与する。
- ⑤ 「どうようひろば」を核とする新たな地域コミュニティを形成し、地域活性化に寄与する。

活動の目的

「地域ぐるみの子育て」を叶えるネットワーク

「どうようひろば」を通して、教職員と保護者、地域住民間の信頼関係が深まり、子どもたちを見守る大人たちによる幅広いネットワークが構築されています。学校と地域の共催による運動会や文化祭に、幼稚園や保育園も参加するなど、学校と地域の連携も進んでいます。「地域ぐるみの子育てを」の気運が高まり、町の活性化に役立っています。



参加意欲を高めるイベント開催
2007年に行われた5周年記念事業。公園では、どんぐりを使ったあてなどが行われました。イベントは、スタッフと子どもたちの参加意欲を高める場にも

「どうようひろば」の主なプログラム

■子どもたちのためのプログラム

子どものために、質の高い遊びや体験の場を提供しています。常設の遊びのほか、毎回異なる遊びのコーナーを設置。物づくり名人による季節遊びや工作教室などの体験活動、親子で参加できる料理教室などを用意し、子どもが好きなものを選んで自由に参加できるシステムにしています。



料理教室で食育も
家庭科室で行われた「ぜんざい会」。親子料理教室など、食育にも取り組んでいます。

■大人のためのプログラム

子どもに遊びの場を提供すると同時に、大人が交流できる場も設けています。公民館主催の講座や、高齢者のためのグランドゴルフ練習、女性のための藍染め講習会など、世代に合わせた複数の教室を開催しています。託児コーナーを設けており、幼児同伴の参加も可能です。託児コーナーでは、スタッフの指導のもとで高学年の子どもに世話をさせ、ベビーシッター体験の場としても活用しています。

参加した子どもたちの声

私は、「どうようひろば」によく行きます。「どうようひろば」は授業じゃ体験できないこともできるので、とても楽しいです。それに、学校では同学年の人とじゃないとほとんど勉強や遊びはしないけど、「どうようひろば」では、低学年の子たちとも仲良くなれるチャンスだと私は思っています。私は「どうようひろば」のイベントの中で小物づくりが好きです。いろいろなものの作り方を覚えられるのがうれしいです。家には、小物づくりで作った物がたくさんござってあります。その中でも、軍手でゾウを作ったのが一番楽しかったので、気に入っています。今度、小物づくりがあるときには、もう一度雑巾でつくりたいです。去年雑巾を作ったときは、おさいほうを習っていなかったのが、よろよろだったけど、今年はきれいにぬえるかもしれないからです。これからも、たのしい「どうようひろば」が続いてほしいと思います。
(小学校5年生女子)

3つの工夫

進める工夫

学校を拠点に子どもの居場所を作ると同時に、大人同士の交流の場を作り、地域ぐるみの子育て実践を進めています。プログラムを複数設け、自由選択制にすることで、多くの子どもたちが楽しめるよう工夫しています。年一回イベントを開催し、スタッフと子どもたちの参加意欲を高めると共に、保護者や地域住人の新規参加を増やす機会として活用しています。

広げる工夫

多くの住民が参加しやすいように公民館と連携を強化し、各種サークルや地域団体に呼びかけ、活動の場を提供しています。地域子ども教室のモデルとして、県内各地からの訪問や問い合わせに対応しています。

続ける工夫

安定した活動継続のために、基金を開設して運営資金を集めるほか、各種団体に活動内容の説明を行い、資金や人的援助、事業の共催などの協力要請を行っています。コーディネーターを置き、組織の拡大と活動内容の向上を目指しています。

所在地：〒840-0863 佐賀県佐賀市嘉瀬町大字十五12-1（佐賀市立嘉瀬小学校内）
TEL：0952-23-6400 / FAX：0952-23-6427 / E-mail：skase@city.saga.lg.jp HP：http://www2.saga-ed.jp/school/edq10107/
代表者：川崎 武夫 / 担当者：村岡 智彦、船津 智



自由な形で自己表現
金杉さんの教育プログラムは、「私という存在」というテーマで自分を表現する発表を行うものです。「強くなりたい」という思いを込めた空手の板割りや、楽器の演奏、ドラマ仕立ての映像発表など、生徒たちの発表形態はさまざま。

■活動領域 家庭 学校 地域 企業 ■3つのこころ

自分に 他者に 社会に
向かうこころ 向かうこころ 向かうこころ

自他を認め合う、自己表現プログラム アイデンティティ形成に向け、 高校生が自己表現する倫理の授業実践 ～「かけがえなさを認め合う場」としてのクラスの可能性～

活動内容の紹介

「個を認め合う場」としてクラスを活用

金杉朋子さんは、講師として高校3年生の倫理の授業を行う中で、「アイデンティティ形成支援に向けた表現教育プログラム」を実施しています。このプログラムは、「私という存在」というテーマで自分を表現する発表を行うというもので、クラスの中で自分を見つめ、他者を知り、他者に知ってもらい体験をくり返しなが、それぞれの「かけがえのなさ」を認め合うことを目的としています。活動はクラス単位で行われ、生徒たちが思いを吐き出し共有する場、また個を認め合う場として、学校の特色でもある「クラス」の再生・活用が行われています。

個性をぶつけ合う、自由な自己表現

プログラムの前半では、グループワークなどを通して、さまざまな角度から自分について考える授業が行われます。後半は、「私という存在」をテーマに、クラス内で自分を表現する発表を行います。発表は、自分について考えてきたことを、生徒自らが発表形態を選んで自由に表現します。歌やスピーチ、映像発表など、個性豊かな発表が行われます。普段は見えない仲間の熱い思いや同じ悩みなどを知る経験は、自己への振り返りになり、また悩んでいるのは自分だけではないという「弱さの共有」が、認め合いにつながっています。

TEL/FAX : 03-3721-4808 / E-mail : kanasugiga@gmail.com

参加した子どもたちの声

この「私という存在」って単純なようで難しいよ。単なる思い出しじゃ駄目。その経験が自分をどのように変えたのか言わなきゃ面白くない。趣味や特技も、それが自分の人生をどういう風に作ってきたかまで発表しなきゃただの「あなたの趣味、特技は何ですか？」になっちゃう。その人の「存在」が見えた発表が心にのこるんだよね。この課題の面白さは口のうまさがあんまり発表に影響しないことだね。この発表で気づいたけど、うちの学校って普段目立たない人たちでも凄く奥の深い人間だなーと感心させられる人がいるよ。そういう人の発表が聞けるのはほんととおもしろいし、じゃあ自分はどんなだったって考える

3つの工夫

進める工夫・広げる工夫・続ける工夫

12年間の活動により、2,900人以上の生徒がこの表現教育プログラムを体験しています。難しいテーマであるため、まず1学期で自分を客観的に見つめさせ、2学期の発表では形態を自由に選べせることで、生徒が主体的に自分を表現できるよう工夫しています。生徒には、発表後に発表のようすを記録したDVDとクラスメートが書いたフィードバックシートを渡し、自分の思いが他者に受け入れられた実感を持たせます。国内外の学校と映像発表会を行うなど、活動内容を紹介し、広げる取り組みをしています。



「おじいちゃんと話そうよ」公演
くしろゴールデンシアターきらり座のオリジナル劇「おじいちゃんと話そうよ」。テレビのない昔のちやぶ台を囲んだ家庭風景や、昔の遊びを見せながらさまざまなメッセージを伝え、家族や友だち、遊びなどについて家族と話し合い、考えさせるきっかけづくりをしています。

■活動領域 家庭 学校 地域 企業 ■3つのこころ

自分に 他者に 社会に
向かうこころ 向かうこころ 向かうこころ

手作りの劇を通して、世代間交流を キッズと高齢者のコラボ劇 「おじいちゃんと話そうよ」

活動内容の紹介

子どもに「大切なこと」を伝えるために

かつて家庭や地域で、人生の先輩としてみんなの相談相手をつとめていたお年寄りの役目を、演劇を通して担いたい。そんな思いから、平均年齢64歳の高齢者劇団、くしろゴールデンシアターきらり座は生まれました。演劇のプロはおらず、脚本や演出、小道具まですべてがメンバーの手作りです。少子化、核家族化が進む現在、子どもたちとお年寄りが交流する機会は減少しています。きらり座は、地域のお年寄りを元気づけ、生きがいを感じられる場を提供しながら、子どもたちとあたたかい交流を続けています。

オリジナル劇「おじいちゃんと話そうよ」

「おじいちゃんと話そうよ」は、子どもたちに「家族とは」「友だちとは」「遊びとは」などについて、家族と一緒に話し合い、考えさせるために作成した、きらり座オリジナルの劇です。約30分間で、昔の家庭風景や遊びを楽しく見せながら、命の大切さも語りかけます。派手な演出や高圧的なセリフはなく、子どもたちがおじいさん、おばあさんから昔話を聞いているような感覚で楽しめるように作られています。子どもたちを舞台上げてメンバーと共に踊るエンディングでは、会場が和やかな空気に包まれます。



参加した子どもたちの声

- おじいちゃん達がものすごく元気に芝居をしてくれたので感動しました。
- 笑ったりウルウルしたりしました。すごく楽しい授業でした。
- 今、私たちはすごくムダをしてるんだな...と思いました。
- うちにもこんなおじいちゃんがいたら楽しいだろうな...と思いました。

3つの工夫

進める工夫・広げる工夫・続ける工夫

オリジナル劇「おじいちゃんと話そうよ」は、小学校の総合学習や福祉フェスティバルなどで上演し、1,000人以上の子どもたちが参加しました。子どもが飽きずに見られる30分という時間の中に、大切なメッセージを凝縮した内容で、セリフは「おじいちゃんはどうした方がいいと思うけど、どう思う？」など、子どもたちに考えさせる表現を工夫しています。今後は学校と協力し、きらり座と子どもたちが劇の練習・準備・上演を通して充実した世代間交流を行う活動を計画しています。また、新しい劇の制作も進めています。

所在地：〒085-0007 北海道釧路市堀川町8-3 佐藤方（事務局）
TEL / FAX : 0154-24-7663 E-mail : sinnpou@purple.plala.or.jp
代表者：谷口 繁美 / 担当者：佐藤 伸邦



総合単元的な道徳学習を
道徳の時間を中心に、すべての教育活動を通して総合単元的な道徳教育を実践しています。年間700人の教育ボランティアが参加し、昔の遊びや裁縫実習などさまざまな教育活動の指導・協力を行っています。

■活動領域 家庭 学校 地域 企業 ■3つのこころ 自分に 他者に 社会に

家庭・地域と協力し、道徳教育を推進 自分をみつめ、 よりよく生きようとする児童の育成

活動内容の紹介

20年以上続く道徳教育の研究・実践

越谷市立大沢小学校は、1987年より3年間、文部省道徳教育推進校（学校・家庭・地域連携推進校）となり、以来毎年「道徳教育研究発表会」を開催するなど、一貫して道徳教育の研究・実践に取り組んできました。子どもたちのよりよく生きようとする道徳的心情や判断力、実践力を育むことを目的とし、道徳の時間を中心とした全教育活動において、子どもたちの意識の流れを大切に「総合単元的」道徳教育を実践しています。活動の継続により、子どもたちに豊かな心が育まれ、学力向上などの成果も表れています。

学校・家庭・地域が一体となった取り組み

大沢小学校における道徳教育の特長のひとつは、学校・家庭・地域が一体となって取り組んでいるということです。子どもたちが学校で身につけた道徳性を発展させ補完するためにも、家庭や地域社会との連携は大切です。そこで大沢小学校では、家庭や地域の理解・協力を得るために、年3回の「学校・家庭・地域連絡会議」開催や、道徳だよりを学区内の全家庭に配布するなどの工夫を続けています。現在、ゲストティーチャーや「安全見守り隊」として、年間700人の地域ボランティアが道徳教育活動に参加しています。

参加した子どもたちの声

- 道徳の時間は楽しい。自分の心がきれいになるような気がする。
- 道徳の時間は間違いがないから安心して発表することができるし、友達の考えが聞けるから勉強になる。
- いろいろな方からお話が聞けたり、体験できたりするからためになる。
- 通学のとき、地域の方がたくさん見守ってくれていて感謝している。

3つの工夫

進める工夫・広げる工夫・続ける工夫

全教職員が一致協力して、子どもたちの道徳性を育むための教育を実践しています。毎年度、道徳研究推進委員会で研究構想を検討し、全教育活動を通して道徳実践力を育む「総合単元的」な道徳学習の充実を図っています。家庭や地域との連携をより深めるために、保護者参画型授業や地域ボランティアの受け入れを積極的に行い、ホームページや広報誌などを活用して普及活動を広げています。20年以上に及ぶ研究・実践を生かし、変化の激しい現代社会で自ら未来を切り開いていける子どもの育成を目指し、活動を続けています。

所在地：〒343-0025 埼玉県越谷市大沢2-13-21
TEL：048-974-8522 / FAX：048-974-8521 / E-mail：osawa-e@school.city.koshigaya.saitama.jp
HP：http://school.city.koshigaya.saitama.jp/osawa-e/ 代表者：田部井 久能 / 担当者：相良 みどり



学んだことをミュージカルに
写真左：創作ミュージカル「そらのふ・し・ぎ」公演。子どもたちは、いのちの大切さ、環境など身近なテーマについて1年間学んだことを、全員が主役の創作ミュージカルにして発表します。写真右：音楽を心と身体で学ぶ、音のワークショップ。

■活動領域 家庭 学校 地域 企業 ■3つのこころ 自分に 他者に 社会に

子どもの可能性を広げるミュージカル創作 小学生の土曜日居場所づくり 「表現のワークショップ&ミュージカル」

活動内容の紹介

身体で表現する喜びを体験

リトミック Gifu は、大垣市教育委員会が行う小学生の土曜日居場所づくり事業、「大垣まるごと土曜学園」の一環として、リトミックを利用した「小学生の表現ワークショップ」を行っています。リトミックは、音楽を心と身体で感じとり、リズム・メロディー・ハーモニーを学ぶと共に、豊かな心を育む音楽教育法です。ワークショップは、高学年の子どもをリーダーに、異年齢グループ編成で行われます。子どもたちは異年齢の仲間たちとさまざまなテーマについて考えながら、身体全体を使って表現する喜びを体験します。

「全員が主役」の創作ミュージカル

ワークショップでは、毎年ひとつのテーマに沿って、話し合いや体験学習を行っています。テーマは、「いのちの大切さ」「いじめ」「環境」「仲間の大切さ」など、子どもたちを取り巻く身近な問題です。そして1年間の仕上げとして、学んだことをミュージカルに創り上げ、公演で多くの観客に向けて発表しています。ミュージカルの創作や公演には専門家や保護者が協力しますが、主体となるのは子どもたちです。「全員が主役」であるミュージカルの創作・公演を通して、子どもたちは大きな感動と自信を得ることができます。



野外活動へ
テーマである「環境」について学ぶために野外活動へ。きれいな水に棲む生き物について調べました。

参加した子どもたちの声

- ほかの場所に遊びに行くよりも、ミュージカルは休まないで来たい。
- お母さんが「勉強が大事だからやめなさい」と言っただけで、友だちが出来たから6年生まで絶対に続けたい。

3つの工夫

進める工夫・広げる工夫・続ける工夫

毎週ワークショップ前にスタッフミーティングで指導内容について話し合い、子どもたち一人ひとりのようすや進捗について細かく確認しています。身体表現やテーマに合わせた体験学習だけでなく、挨拶・掃除など生活面でも指導を行い、学ぶための基本態度を身につけてさせています。異年齢グループの学習で、子どもたちの自主性を伸ばし、思いやりの心を育てます。リーダー体験やミュージカル公演を経て、引きこもりや不登校を克服した子どももいます。今後は行政との連携を強化し、活動の輪を広げることを目指しています。

所在地：〒503-0808 岐阜県大垣市三塚町501-1
TEL：0584-78-9598 / FAX：0584-47-5052 / E-mail：dezaki82@yahoo.co.jp HP：http://www.rito-gifu.net/
代表者(担当者)：出崎 恭子



アートの中で能を楽しむ
造形遊びと鑑賞を組み合わせた「アートによる能案内」。演目が「土蜘蛛」のときは、紙などを使って能楽堂に蜘蛛の巣をはりめぐらし、自分たちで作った蜘蛛の巣の間から能を鑑賞しました。

■活動領域 家庭 学校 地域 企業 ■3つのところ 自分に 他者に 社会に

造形あそびを通して、能の魅力を体感 「アートによる能案内」と 「能と遊ぼう！」

活動内容の紹介

日本の伝統文化に身体で触れる

山本能楽会では、観世流能楽師・山本章弘さんが中心となり、NPO 大阪アーツアポリアの中西美穂さんの協力のもと、造形遊びを通して「創造的な能の世界観を体験する小学生を対象としたワークショップ」を行っています。「アートによる能案内」と「能と遊ぼう！」は、子どもたちが能を楽しめるよう、全国で初めて現代美術の視点を取り入れた、オリジナル体験学習プログラムです。活動は、本物の能面や能装束を教材に、国登録文化財である山本能楽堂で行われています。子どもたちは能の楽しさと創造するよろこびを体験すると共に、日本伝統の建築や芸術に触れることができます。

興味を引き出す体験型プログラム

「アートによる能案内」は造形遊びと鑑賞を組み合わせたプログラムです。まず演目について歴史やあらすじを学び、謡や太鼓等を練習し、演目に合わせた作品を作って興味や理解を深めた上で、能を鑑賞します。演目が「土蜘蛛」の場合は、能楽堂に蜘蛛の巣をはりめぐらし、蜘蛛の巣の間から能を鑑賞します。「能と遊ぼう！」は、毎回違った内容で楽しく能を学ぶ全10回のプログラムです。アートプログラムは子どもの感性を引き出し、謡の練習では全員がうたえるようになります。共に、体験を通して能への感情移入を促すことで、子どもたちは自発的に能を楽しむようになります。

所在地：〒540-0025 大阪府大阪市中央区徳井町1-3-6
TEL：06-6943-9454 / FAX：06-6942-5744 / E-mail：info@noh-theater.com HP：http://www.noh-theater.com
代表者：山本 旭彦 / 担当者：山本 佳誌枝



みんなで作った絵本「にこのゆめ」
高学年と低学年で役割分担をし、協力して絵を描きました。完成した絵本を手にしたときのうれしさは、忘れられない思い出に。

■活動領域 家庭 学校 地域 企業 ■3つのところ 自分に 他者に 社会に

地域ぐるみで、子どもの夢をサポート 神石高原町を舞台にした 絵本が作りたい

活動内容の紹介

絵本作りの夢で、町がひとつに

2007年、青少年育成広島県民会議が実施する「夢配達人プロジェクト」に、二幸小学校の子どもたちの「絵本作家に手伝ってもらい、町を舞台にした絵本を作りたい」という夢が採用されたことから、夢配達人プロジェクト神石高原町実行委員会の活動は始まりました。当時連続放火事件が発生し、不安に包まれていた町に明るいニュースを届けるためにと、二幸小学校全児童18人、学校、保護者、行政が一致団結。子どもたちが主体となり、それを地域の大人がサポートする形で、オリジナル絵本の制作が行われました。

夢を持ち、その夢を叶える体験を

絵本作りは、地域のお年寄りや農家に取材して、神石高原町の風土・産業・伝説・特色などについて学ぶことから始まりました。ストーリー作りや、絵本作家への指導依頼など、作業はすべて子どもたち主体で進められ、地域の大人たちは連携して取材の協力や移動の手配などのサポートを続けました。1年間の活動を経て絵本「にこのゆめ」が完成。子どもたちは、夢を持ち、その夢を形にする体験をすると共に、地域の大人たちとの交流を通じて、自分たちが住む町について深く学ぶことができました。

所在地：〒720-1522 広島県神石郡神石高原町小島2025
TEL：0847-89-3344 / FAX：0847-85-2227 / E-mail：jk-kyoiku@town.jinsekikogen.hiroshima.jp
代表者：小林 和枝 / 担当者：野村 俊英



現代美術と伝統芸能

教室には国登録文化財の山本能楽堂を、教材には本物の能面や能装束を使用。現代美術と伝統芸能を同時に体験できます。

参加した子どもたちの声

- 大きくなったら能楽師になるのが夢です。（4年男子）
- 「羽衣」の謡はむずかしかったけどなぜかおぼえた（1年男子）
- はじめは能楽堂に来たくなかったけど、来ていたら楽しくなって、10回全部来れた。もう1回くらい来たいなあ…（小学生の姉についてきた弟・年長）
- いっぱいすごいものがあった楽しかった。舞台がすごかった。その舞台でうたえて楽しかった（2年男子）

3つの工夫

進める工夫・広げる工夫・続ける工夫

プログラムは、「子どもたちが自発的に能を楽しむこと」を最優先に、子どもの目線でさまざまな工夫が凝らされています。チラシやホームページなどで広報活動を行い、保護者や地域へボランティアスタッフとしての参加を呼びかけ、家庭・地域との連携を進めています。子供が参加する「新作能」や、「少年少女合唱団／羽衣うたい隊」結成など、ワークショップから発展した新たな活動を進めています。活動を全国に広げるためのプログラムのマニュアル化、外国人や大人、親子で参加できる新プログラムの作成など、活動をさらに発展させる取り組みも視野に入れています。



自分たちの町を学ぶ
絵本の舞台となる町について学ぶために、トマト農家など地域で働く人々、鍾乳洞などの自然を取材。

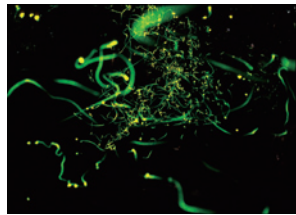
参加した子どもたちの声

教科書の「つりばしわたれ」の絵が好きで、「武富まさえ先生」にはじめ絵を教えてくださいと手紙を書きました。先生はすぐに3月に学校へ来てくれると返事をくれました。それから急に連絡がとれなくなり、友達の池田げんえい先生から連絡がありました。脳梗塞で倒れ入院しているので「私の代わりに二幸小へ行って」と震える字のメモを託されたので代わりに行きます。とのことでした。「早く元気になって」とみんなで手紙を書きました。そのあと武富先生は亡くられました。先生のためにもいい絵本をつくって天国の武富まさえ先生に見てもらいたいです。

3つの工夫

進める工夫・広げる工夫・続ける工夫

子どもたちに「夢を持つこと」「夢を叶えること」を体験させるために、青少年育成広島県民会議や広島県子ども夢基金などの助成を受け、学校、PTA、町内会など地域の大人が連携して協力しています。多くの作業を子ども主体で行わせることで、想像力と創造力が育ち、素晴らしい絵本が出来上がりました。絵本は県内の小学校へ無料配布し、また学校の公開研究会や広島県民会議のフォーラムで発表を行うなど、活動を広く伝える取り組みをしています。今後も各団体の連携関係を継続し、さらなる活動の発展を目指しています。



自然を体感する生き物観察会
久米島ホタルの会は、ホタルをはじめ、サンゴ、ヤドカリなど、季節ごとに島の生きもの観察会を開催しています。自然観察と講師によるレクチャーを組み合わせたプログラムで、自然環境の美しさ大切さを学びます。

■活動領域 家庭 学校 地域 企業 ■3つのこころ

自分に 他者に 社会に
向かうこころ 向かうこころ 向かうこころ

自然を知り、生き方を考える体験学習 ホタル舞い飛ぶ 久米島の島づくり

活動内容の紹介

ホタルが棲む環境を守るために

久米島ホタルの会は、1993年に久米島で新種のホタル「クメジマボタル」が発見されたことをきっかけに、94年に結成された有志の会です。ホタルが棲む環境を蘇らせる活動を通して、人の心と身体を育む自然環境の大切さを伝えるために、子どもや親子を対象としたさまざまな活動を行っています。2000年には、ホタルの保護・保全を目的とした「久米島ホタル館」を開館。施設周辺は「ホタルの里」として、ホタルのほか久米島に生息するさまざまな生きもの保護のための環境が守られており、豊かな自然を体感することができます。

身体で学ぶ自然の美しさと大切さ

久米島ホタルの会では、「ホタル観察会」をはじめとする季節ごとの生きもの観察会や、リバーウォッチングなどの環境体験学習を定期的に開催しています。これらは共に、生きものの観察や調査などの自然体験と、講師によるレクチャーを組み合わせたプログラムです。また、海岸や森林の清掃活動、田植えや植栽による里山風景の再現など、自然環境の保全に貢献しながら、理解を深められるような取り組みも続けています。これらのイベントは学校行事としても取り入れられ、多くの子どもたちが参加しています。



環境保全活動の実践
海岸の清掃活動や里山の植栽など、自然保全活動を取り入れ、環境保全へ協力しながら理解を深めるプログラムを行っています。

参加した子どもたちの声

- ゲームよりも楽しい。だって、生きているもん（川でエビやウナギを釣って）
- 貝殻だと思ってポケットに入れていたら、みんな動いて逃げて行っちゃってびっくりした！（ヤドカリ観察会に参加して）
- 僕たちは、人間と生きものが共生できる世界をつくっていききたい（久米島で行われたラムサールセンター主催のワークショップ）
- このゴミ、重くて、一人だと持てないのに、みんなで持つと、軽いし、なんだか楽しいね。（クリーンビーチに参加して）

3つの工夫

進める工夫・広げる工夫・続ける工夫

学校・行政・地元企業など地域が丸となり、久米島だけでなく地球全体の自然環境改善のために、子どもたちへ自然の大切さを教え、自然を守る生き方を伝える活動に取り組んでいます。地域ボランティアの協力により、観察会などのイベントが年間を通して行われ、学校の授業や行事としても実施されています。また、行政の協力で講演会やイベントを積極的に開催し、その様子は地元新聞やテレビなどにも取り上げられました。ホームページやブログも活用して、活動内容や自然保全への理解を広げる取り組みを続けています。

所在地：〒901-3123 沖縄県島尻郡久米島町字大田420
TEL/FAX：098-896-7100 / E-mail：kumehotaru@yahoo.co.jp HP：http://www.kumehotarunokai.com
代表者：宇江原 総清 / 担当者：佐藤 直美



身近な活動から環境問題を理解
写真左：向井さんと子どもたちは、さまざまな環境保全活動を行っています。写真は、日野川で行った水生生物調査。写真上：回収した使用済み割り箸を工場へ持参。資源の有効活用にも取り組んでいます。

■活動領域 家庭 学校 地域 企業 ■3つのこころ

自分に 他者に 社会に
向かうこころ 向かうこころ 向かうこころ

子どもから地域へ広がる環境保全活動 「泳げる中海を取り戻す」 身近に出来る水質浄化活動を機軸に、 リサイクルの実践、小さな環境活動を積み重ねる

活動内容の紹介

地域の課題に子どもたちと取り組む

向井哲朗さんは、「子どもも大人も、身近な環境問題を五感で感じることが課題解決への近道」との考えから、地元の天然汽水湖、中海の水質浄化活動を中心にさまざまな環境保全活動を行っています。1990年に、地域の子供たちと「彦名地区チビッ子環境パトロール隊」を結成。「泳げる中海を取り戻す」ことを目標に、子どもたちと環境パトロールなどの活動を続けています。活動内容は、毎月町内全戸に配布している手作りの広報誌「環境新聞・中海」で紹介し、地域へ理解と協力を呼びかけることで、活動の輪を広げています。

地道な活動で育む「思いやりの心」

「彦名地区チビッ子環境パトロール隊」は、向井さんと共に定期的に町の環境パトロールや中海の水質調査を続けています。パトロールでは、町内の道路、中海海岸、生活排水路などを「空き缶やタバコのポイ捨てはないか」「川にご飯粒や食べかすが流れていないか」など20の調査項目をもとにチェック。また、廃天ぶら油や使用済み割り箸を回収し、資源の有効活用にも取り組んでいます。中海の水質浄化という身近な活動を通して、子どもたちは環境問題への理解を深め、人や地域、環境への気配りや思いやりの心を学んでいます。



生物の観察・調査も
メダカやシジミなど地域に棲む生物の観察・調査、中海の水質調査を続けています。写真は、メダカの採集調査。

参加した子どもたちの声

「彦名地区チビッ子環境パトロール隊」に入り、向井さんからいろんな環境のお話を聞かされたら、南極のペンギンが一匹でも多く救える気がしています。割り箸や廃食油をはじめ、リサイクルの大切さや小さな環境保全の活動が、大きな成果になる事を教えていただきました。これからも活動を続けていきたいです。（小学校3年）

3つの工夫

進める工夫・広げる工夫・続ける工夫

「泳げる中海を取り戻す」ための活動を約20年間継続しており、地域の大人と子どもが一丸となつて、排水の浄化活動や清掃活動を実践しています。多くの子どもが「彦名地区チビッ子環境パトロール隊」として活動できるように、毎年、地域の小学校に年間活動計画を提示してメンバーを募集しています。「環境新聞・中海」は、市や県の環境担当課、小学校、公民館などへも配布し、活動を広く紹介しています。県内外や外国のエコクラブなどとも環境保全活動について情報交換し、学び、励まし合いながら活動の発展を目指しています。

所在地：〒683-0854 鳥取県米子市彦名町4530-2
TEL / FAX：0859-29-3974 / E-mail：hsmrs477@ybb.ne.jp